



中村俊定文庫  
文庫 18  
564



夏草の

完

あはれなるものぞ

あはれなるものぞ

あはれなるものぞ

あはれなるものぞ

あはれなるものぞ



けつを授けしとて夏志しん  
とそ名所をなれ

ついでに電をなれ



安永九庚子秋



夏志しん集



門神も菊見く帰るさびるか那	持義
小神行をむりおよぶ秋	李院
昼は月高形のあし弱平	龜文
柴木あすし燃志さる也	舟
まらう人に打もをすも一人と	古友
あしかりあつたち夏の降おす	枕牛

5  
 やうくにそけつつうへある流し船 赤  
 丁浮城すそを巻の穴 義  
 幼を抱き抱ひのかこつき中 舟  
 口邊にかつた恋のけころ 文  
 枕まのさめてを成り成る 院  
 明かさちう記さし乃種 里  
 除くもも入梅の介さその色 牛  
 十と味 徒はそよなり 友

名  
 鏡花梅よらる草うさくじしを 義  
 こころのまゝおやおねを花 舟  
 月影の影織なる陰よ越 友  
 ち路あふと風の止しその夜 院  
 一細に神供女裡を引あきて 文  
 こすし男とももの立ち酒をむ 牛  
 おもらも舞あむとの常の紋 里  
 めとんしとめき燈し大 義

川舟おねのし鼻をこまへあま  
志ろく一匹巾よせふせの中  
おもゆく櫓か神くさる鼻のあ  
入りかろりの敷物よとん  
とまおろく机押やうま一物  
襦りくろく母お経立  
かりしとあゆる鳥にやうの月  
まら白くろくまお急の山鳥  
可

3  
旅人おねあまろくあまの風衣  
まね指ん志ろく賽あ  
あまろくあまのひくまおねあま  
まねお井まろく調お三丁  
あ側の林つろくあまお急  
まらやろくあまお急  
文 里 院 文 牛 衣

寺中の紙巻を引りり紫野 素里  
来しく足靴をぬき枯一輪 好義  
空しく静けさへもぬ離つきく 和身  
日さつこと月かすなり 古友  
そなたをとりきと旅あく徳以眩 樹牛  
秋のまことの路中忘る形 龜文

四

らんくを今ぬる心種あり 素里  
田や島あく廓えすく 里  
都神の中まゆに刀とせりり 義  
むとあふ静けさよにゆあく 舟  
さきくもくみきたるはこかき 友  
糸へむあく一皆居りる 牛  
旅し一途を今年の日北秋 文  
柏よかあふ静けさあつ 院



朝日おほくは國の目お新  
いつお月よかお脊戸お新  
あひく成るもえよもをむこ  
酒ををよもは東風のよし友  
名  
正月お標の目しも格おに  
並ひくあれも多き關の具  
あつしと盛れあつと盛れ  
君れもつと盛れあつと盛れ

風をく余昔おはし何はけう嶽  
火新くや急のよもある  
百こも生るを忘れた欲りし  
あのをあお標娘くかふ  
燈籠よりの故もらのあひ  
聖におおあおあおあ  
五つおり遊かけくおああ  
橋をくおあおのあああ

3  
 忘りの病尼よと顔様子  
 舟  
 赤丸のぬる直糸の神  
 友  
 内陣の糸ききりくぬき也  
 牛  
 むん糸の海のきりり  
 文  
 糸の文に糸ぬきは格の連  
 境  
 つむき足神をきりきき糸  
 糸

つまむ糸の糸ぬきは格の連  
 境  
 糸の文に糸ぬきは格の連  
 境  
 つむき足神をきりきき糸  
 糸  
 赤丸のぬる直糸の神  
 友  
 内陣の糸ききりくぬき也  
 牛  
 むん糸の海のきりり  
 文  
 糸の文に糸ぬきは格の連  
 境  
 つむき足神をきりきき糸  
 糸

とくちやうと角力能き強弟子信也 宅舟  
 南まききし度あた店 牛  
 二所と前ち能きあけさう 友  
 きしきり可るあははより 義  
 こらとちまぬあれし鐘能食 院  
 花も信くあまのつ能く 文  
 川能の能減る目あきし 里  
 とくちと別る風のそせ能あ 舟

角極るとに角能く娘ひや 牛  
 さあとち能く能あすし 友  
 穿せんに思ひの糸の能 義  
 山能村くまきあまより 院  
 名 習しにも能食能中の芋大根 文  
 掛あ娘し能くの能 里  
 かる能かると軍能あより 舟  
 さるとりて能村よ能波 牛

つらくと夕日如影る文珠堂友  
今乃業た明正す 是 義  
あつちてもあま純果る悟字を 院  
風中ちりりあみのまれく 文  
秋をくち用も終二と百 里  
日つちりても過ぎよの人を 舟  
このめくもも確を結るは 牛  
きんやほほほは自ら草子あま 友

3  
甚積のまをた極るあを鯛 義  
すかろくと早をこ立力 院  
昆比羅のこを揺ひ け 文  
帆乃くりたりとそら風の船 里  
意を末の風の落しきを 舟  
皆仲間もあふ出代り 義

水もやまもあつて物静 龜文  
みづもやまもあつて物静 龜文  
みづもやまもあつて物静 龜文  
みづもやまもあつて物静 龜文  
みづもやまもあつて物静 龜文  
みづもやまもあつて物静 龜文  
みづもやまもあつて物静 龜文  
みづもやまもあつて物静 龜文  
みづもやまもあつて物静 龜文  
みづもやまもあつて物静 龜文

いづれか念ひの太刀佩く 梶牛  
目ん物えゆる妹々ぢい 文  
ゆきのうらな舞のあゝ風のあ 舟  
よやあゝあゝあゝあゝあゝあゝ 里  
大ねりく男はあゝあゝあゝあゝ 義  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ 院  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ 友  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ 牛

折るは味はなまなまはるのおまき  
 春のうらみおきよのうらみ  
 之れはなまなまはるのおまき  
 何れもはるのうらみ  
 文  
 折るは味はなまなまはるのおまき  
 春のうらみおきよのうらみ  
 之れはなまなまはるのおまき  
 何れもはるのうらみ  
 文  
 折るは味はなまなまはるのおまき  
 春のうらみおきよのうらみ  
 之れはなまなまはるのおまき  
 何れもはるのうらみ  
 文



己の人の世に世に世に世に  
 しるる世に世に世に世に  
 下なる世に世に世に世に  
 世に世に世に世に世に  
 世に世に世に世に世に  
 世に世に世に世に世に  
 世に世に世に世に世に  
 世に世に世に世に世に

あきかかかかかかかかかか  
 はや始り物なる高き文  
 信なる世の世なる世の世  
 風はあきかかかかかかか  
 世の世は世に世に世に世に  
 世の世は世に世に世に世に  
 世の世は世に世に世に世に  
 世の世は世に世に世に世に



ま け ち り け ち り け ち り  
目 け ち り け ち り け ち り  
花 け ち り け ち り け ち り  
大 け ち り け ち り け ち り  
ち け ち り け ち り け ち り

辰 院 中 給 母 矢 之 可 也 抄 一 年  
何 故 一 年 中 給 母 矢 之 可 也 抄 一 年  
一 年 中 給 母 矢 之 可 也 抄 一 年  
大 而 以 給 母 矢 之 可 也 抄 一 年  
故 子 母 矢 之 可 也 抄 一 年  
給 母 矢 之 可 也 抄 一 年  
大 而 以 給 母 矢 之 可 也 抄 一 年  
何 故 一 年 中 給 母 矢 之 可 也 抄 一 年

言とて客もく能くはる梅  
扇はさみく耳もくはる雲  
心くく心もくもく心もく  
一すもく院もくもくもく  
言く月もくもくもくもく  
人にきりもくもくもくもく

友  
友  
友  
友  
友  
友  
友  
友

心もくもくもくもくもく  
心もくもくもくもくもく  
心もくもくもくもくもく  
心もくもくもくもくもく  
心もくもくもくもくもく  
心もくもくもくもくもく  
心もくもくもくもくもく  
心もくもくもくもくもく

友  
友  
友  
友  
友  
友  
友  
友

そよよ〜そよよ〜そよよ〜そよよ〜  
ほろろのほろろのほろろのほろろ  
ほろろのほろろのほろろのほろろ  
ほろろのほろろのほろろのほろろ  
ほろろのほろろのほろろのほろろ  
ほろろのほろろのほろろのほろろ  
ほろろのほろろのほろろのほろろ  
ほろろのほろろのほろろのほろろ

石垣のよもぎのよもぎのよもぎのよもぎ  
瓜や茄子のよもぎのよもぎのよもぎ  
あまのほろろのほろろのほろろのほろろ  
あまのほろろのほろろのほろろのほろろ  
あまのほろろのほろろのほろろのほろろ  
あまのほろろのほろろのほろろのほろろ  
あまのほろろのほろろのほろろのほろろ  
あまのほろろのほろろのほろろのほろろ

とむらわら人にいふも海はるき  
るれしはあまのきききき  
大津画の看<sup>宿</sup>板ととも同し  
き能しとあつては  
酒棧屋ともあつては  
枝折戸志免んたの夕言 舟

